愛知淑徳大学
全学日本語教育部門
広報誌

あっと@JL
全学日本語教育通信

第6号
2014年3月31日発行

@JLとは？
全学日本語教育部門は、学生の日本語運用力（Japanese Literacy）向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用力向上に向けたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、“@”に込めました。

全学日本語教育部門は
開設4周年を迎えました！

自分の頭で筋道を立てて考える

全学日本語教育部門長・文学部教授　小倉　斉

『男はつらいよ～寅次郎サラダ記念日』（1988年）に興味深い場面がある。ひとつは、小諸病院の女医真知子の家に食事に招待された寅さんが、〈小諸なる、古城のほとり、雲白く、遊子かなしむ〉をめぐって真知子およびその姪由紀とやりとりをする場面だ。「遊子って寅さんみたいな人のことをいうのね」と言われ、「オレみてえな意気地なしが勇士だなんて。でも、爆弾三勇士とか真田十勇士ってのはガキの頃ずいぶん憧れたなあ」と答えて笑いを誘う。いまひとつは、甥の満男に「何のために勉強するのか」と尋ねられた寅さんが「勉強した奴は自分の頭できちんと筋道を立てて考えることができるんだ」と答える場面だ。「ユウシ」から「勇士」しか思い浮かべられない寅さんの「自分の頭で筋道を立てて考える」という発言は重く響く。

平成21年度就職支援体制調査（2010年6月経産省）によると、企業は学生に対し「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション能力」といった内面的な能力要素の不足を強く感じており、とりわけ「社会に出て活躍する」ための「コミュニケーション能力」を重要視しているという。「コミュニケーション能力」には「いかに正確に情報を伝え、正確に情報を受け取るか」という側面と「人との関係性をいかに保つのか」という側面がある。第1のポイントは「自分の意見を分かりやすく伝える」発信力と「相手の意見を丁寧に聴く」傾聴力だ。第2のポイントとしては、意見や立場の違いを理解するための「柔軟性」、自分と周囲との関係性を理解するための「状況把握力」などが挙げられる。

2010年度から本格的にスタートを切った愛知淑徳大学の全学日本語教育。1年生対象の必修科目「日本語表現T1」と応用科目「日本語表現T2」の他にも多彩な発展科目を準備し、体系的・段階的なカリキュラムを構成。オリジナルテキストも毎年改訂し、学生の実情に合ったものとしてほぼ定着した。「日本語表現」のスキルを体系的に学ぶことで、より精確な言葉で「考え」「理解し」「表現する（伝える）」力が身につき、やがてそれは、円滑なコミュニケーションを成立させる力、考えるための力、社会に参画する力、よりよい人間関係を構築する力につながると確信している。

ただし、4年目を終えようとしている今だからこそ考えなければならない課題もある。あなたは場面に応じた言葉の使い分けができるだろうか。「新しく農業を始めるには、地域の〈①支援、②手助け、③サポート〉が必要だ」について、大勢の人の前で話すとき、友達同士で話すとき、初めて会うお年寄りと話すとき、それぞれ①～③のどの言葉を用いればよいのか。日本語を構成する語種（和語・漢語・外来語）に注目し、文脈に応じた和語・漢語・慣用句・ことわざを使いこなし、文脈に合った外来語を使いこなす力、すなわち語句を「適切に使う力」を身につける。これこそが「自分の頭で筋道を立てて考える」ための第1歩なのである。

4年間をふりかえって ――所属教員から――

9,000人と向き合った4年間

全学日本語教育部門准教授
外山敦子

2010年4月、1年全学必修科目「日本語表現」が開講しました。年間受講生2,500人、教員9人が担当するマンモス科目です。授業はオリジナルテキストを使い、全75クラスが同じ内容でおこないます。この科目運営をとりまとめるのが、私の役割のひとつでした。

今も記憶に残る感慨があります。2年間の開講準備を経て、満を持してスタートした直後のことです。学内のいたるところでテキストを手にした学生とすれ違う。図書館で、食堂で、大学に向かうバスの中で、1年生とおぼしき学生がみな同じテキストを開いて勉強している――。この光景は、必修化にこぎつけた喜びとともに、私に軽い恐怖をもたらしました。“2,500”という数字が引き起こす〈現実〉を目の当たりにして、全学必修科目をコーディネートする責任の重さを、眼前の学生たちから突きつけられた気がしたのです。

あれから4年。小倉部門長主導のもと、同僚教員の尽力、学内各部署の協力を得て、この科目は年々充実・発展を遂げてきました。今年度はとうとう1～4年の全学生9,000人が既履修生になりました。困難もありましたが、その時に私を鼓舞したのは、4年前のあの「恐怖」。そして、最終日に「受講してよかった」と言いながら教室を後にする、歴代受講生たちのすがすがしい笑顔でした。

長期的な視点で

全学日本語教育部門講師
櫛井亜依

「T1* とT2** を思い出して！」――これは私が「日本語表現A1***」でしばしば口にするフレーズです。

私は1年生対象の「日本語表現T1」、「日本語表現T2」と、2年生以上が受講する「日本語表現A1」の授業を担当しています。T1では大学生として必要な基礎的な文章表現力を身につけ、T2では高度な学術的文章の書き方について学びます。A1で再会した学生たちは、1年生のころとは一味違う論証力で、読みごたえのあるレポートを披露してくれます。一方で、何を書くかに集中しすぎて、T1・T2で学んだ「どう書くか」がおろそかになる場面もありました。そのときに言うのが、先述の「T1とT2を思い出して！」です。

これが学生にとっては反復学修の機会となります。継続履修できるよう体系的にカリキュラムが整備されていることの意図はまさにここにあると言えるでしょう。しかし、1年次での学修内容を定着させるという新たな課題を自覚する瞬間でもあります。

試行錯誤の毎日ですが、様々な学年の学生と向かい合い、長期的な視点で成果と課題を確認できるということは、私の、教員としての最大の武器になっています。

継続して学ぶ：継続して教える

全学日本語教育部門講師
深津周太

2011年に別科目の非常勤講師として本学に着任した際、当時担当していた学生から「日本語表現の課題の準備しなきゃ！」という言葉をよく聞きました。まさか数ヶ月後、自分が「日本語表現の課題の採点しなきゃ！」というせりふを口にすることになるとは、このときは想像もしていませんでした。

「日本語表現」を担当した1年目、学生が作成した小論文やレポートへの評価は個々のレベルにとどまりがちでした。しかし今年度、2年目を迎えてようやく全体的な傾向に目が行くようになり指導の幅もわずかながら広がったように感じます。「日本語表現」科目には段階別の科目が設けられており、継続学修を重視する方向性が明示されていますが、継続することが大事なのは教える側も同様だということです。

「日本語表現」が全学共通科目化して4年。そのうち、教員として関わることができたのはちょうど半分の2年にすぎませんが、この2年間の経験から教わったことは少なくありません。継続しながら、それを活かして新たな試みを。簡単ではありませんが、せっかく学んだからには努力です。

何を、どのようなことばで伝えるか

全学日本語教育部門講師
森本俊之

「日本語表現T1*」、「日本語表現T2**」を担当する中で、教え方に頭を悩ませることは多々ありますが、そのひとつが「何を、どのようなことばで伝えるか」です。

上記の科目は、論理的な文章を作成する技術を身につけることを目的としています。テキストに掲載されている技術の他にも、適切に考え、適切に書くために伝えたいスキルは山ほどありますが、いかんせん授業時間には限りがあります。「山ほど」の中から、優先的に伝えるべきことや特に伝えたいことを精選しなければなりません。

さらに、技術を教える上で、その解説には技術を的確に表現する意味的厳密さが求められます。それらはややもすれば難解な表現に、あるいは膨大な情報量を有する説明になってしまいます。学生たちに技術をより深く納得できる形で修得させるためには、解説をいかに簡潔かつ平易なものにするかについて熟慮しなければなりません。

着任して数年、以上の悩みは残念なことにいまだに解消されません。多少なりとも改善できていることに気づかないのか、あるいは微塵も改善できていないのかは不明ですが（前者であることを強く望みます）、いずれにせよ、悩める日々は続くのです。

仲間と考える

全学日本語教育部門講師
入口　愛

「日本語表現」科目では、学生を複数のグループに分け、作業をさせることが多くあります。グループワークについて学生に尋ねると「自分では気づけなかったことに気づけた！」や「一人ではここまでできなかった！」といった内容のコメントが多く返ってきます。授業のなかで、学生が互いに学び、成長する姿を目の当たりにし、その効果に驚きました。

グループのなかで各自が役割を果たし、一つのものを作りあげる。ふりかえると、これは学生だけの話ではなく、私自身が本部門の一員として4年間過ごしたなかで経験してきたことのようにも思えます。例えば、私が担当する広報誌の編集。企画を考え、同じ業務を担当する先生と話しあい、不十分な点を補う。その企画案を今度は全部門教員に諮り、よりよい紙面になるよう議論する。その都度の話しあいで、自分には全く見えていなかった点に気づくことが多々ありました。この広報誌は「一人では到底できなかった」、多くの先生と学生との協力があって作り上げることができたものだと改めて実感しています。本学に着任し、チームで考えることの意味を知ったことが、小さいながらも私にとっては大きな一歩でした。

濃密な４年間

全学日本語教育部門講師
畑　恵里子

「日本語表現 T1*」、「日本語表現 T2**」。これは、本学の１年生が学部を問わず履修できる科目です。そして、本学におけるわたくしの担当科目でもあります。

大学入学直後の１年生は、当初、この科目を高校の国語と変わらないと思いがちです。「今さら日本語の勉強の必要などない」との言葉を、しばしば耳にしてきました。しばらくすると、新入生たちは文章作成のスキルの重要性に気づきはじめます。そして、大学で求められるレポートのレベルについて認識し、その基準を満たすよう、文章作成に真剣に向き合うようになります。

事実を正確に、かつ、分かりやすく説明するということ。それがいかに重要か。それまで自分がいかにあいまいな文章を書いてきたか。それはわたくし自身にも当てはまります。毎週、学生の添削作業を通じて、彼らとともに成長できました。そんな気がする濃密な４年間でした。

【注】日本語表現科目のカリキュラムについて

*** 日本語表現 T1〈基礎〉**
- １年前期開講、全学必修。
- 大学生に必要な文章表現のスキルを学ぶ。

**** 日本語表現 T2〈応用〉**
- １年後期開講、学部ごとに必修または選択。
- 〈基礎〉をふまえ、レポートの書き方やプレゼンの方法を学ぶ。

***** 日本語表現 A1〈発展〉**
- ２～４年前後期開講、選択。
- 〈応用〉をふまえ、より高度なライティング・スキルを学ぶ。

書く書くしかじか…
学生から、教職員から

大学生活に必要だった「日本語表現」

文学部教育学科4年
木下奈々

大学１年生の時、全学必修科目である「日本語表現」を受講していました。授業では、毎回の課題や小テストに加え、レポートの提出やプレゼンテーションもありました。「大学１年の授業の中で何が大変だった？」と聞かれたら、すかさず「日本語表現」と答えると思います。しかし、「日本語表現」を受講してきたからこそ、身についた力があります。それはレポートを書く力や、プレゼンテーションで分かりやすく話す力です。これらは他の授業でも役に立ちました。

また、「日本語表現」の先生には４年間大変お世話になりました。教員採用試験対策として小論文の練習に付き合ってくださったり、願書を添削してくださったりしました。日頃、日本語で話し、書いているものの、場面に応じた適切な表現が何であるかをしばしば判断しかねる私にとって、常に先生に相談できたことはとても心強かったです。「日本語表現」で身につけたスキルを自信の一つにして、社会人になっても頑張っていきたいと思います。

※木下さんは名古屋市教員採用試験に見事合格し、4月から小学校教諭として新たなスタートを切ります。

インフォメーション

祝 ☆平成25年度第2回日本語検定で「東京書籍賞 最優秀賞」を受賞

2013年11月9日に実施された「第2回日本語検定」学内団体受検において、本学が成績優秀により「東京書籍賞 最優秀賞（大学・短期大学の部）」を受賞しました。今回の検定結果は以下のとおりです。

▶日本語検定団体受検（2013年11月9日実施）結果

受検者　105名（2・3級合計）
2級認定者〈準認定含む〉28名
2級認定率〈準認定含む〉49.1%
※認定率は昨年度から約20ポイント上昇しました。

☆第２回「全学日本語教育部門授業実践報告会」開催（2013年9月3日）

「日本語表現」科目の学修内容とその成果について報告する「授業実践報告会」を開催しました。当日は本学教職員を中心に多数の参加があり、学生の日本語運用力を高めるための課題等を共有することができました。

【第１部】平成25年度授業報告

◎平成25年度「日本語表現T1・T2」実施報告
（外山敦子）

◀第1部の様子

【第２部】実践報告・研究発表

◎話しことばの修正における'語レベルの言い換え'への依存
—オノマトペ由来の連用修飾表現「しっかりと」の使用から—
（深津周太）

◎小論文における論証の評価方法について
—語用論的見地から—　（森本俊之）

◎ピア活動の効果を高めるグループ編成
—小論文のグループ添削における実践を通して—
（外山敦子）

※報告・発表者は、いずれも本部門所属教員

☆平成25年度後期「愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」受賞者決定（主催：図書館、協力：全学日本語教育部門）

応募総数181件のうち7名が入賞しました。

大　賞　竹内　彩乃さん（文学部教育学科4年）
準大賞　榊原和佳奈さん（心理学部1年）
　　楠根　楓菜さん（メディアプロデュース学部2年）
ほか、佳作4名

☆取材記事

◎「日本語の運用スキルを身につけることは日常生活にも役立つ」
（朝日新聞デジタル「聞蔵シリーズ活用事例のご紹介」2013年８月）
※「日本語表現」科目における新聞データベースの活用方法に関する取材記事が公開されました。

編集後記

本号を編集しながら、この4年間を思い返しました。ふりかえることは重要ですが、いまはそこから何を得て、それをどのように活かすのかがさらに重要だと自分に言い聞かせる日々です。
（入口 愛）

発行年月日　2014年3月31日
編集／発行　愛知淑徳大学全学日本語教育部門
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
TEL：0561-62-4111（代表）
nihongo@asu.aasa.ac.jp